

クラリネットの歴史を語るにはこの人こそふさわしい！ 製作家と演奏家の視点で歴史的なクラリネットを深く掘り下げ、現代にその楽器を復元する一人。しかもクラリネット発祥の地といわれるニュルンベルクに近く工房を構える地の利の良さで、文献資料もくまなく当たる研究者でもある。去る11月、歴史的クラリネットのアンサンブル「クラモニア」の一員として来日した機会に、クラリネット誕生の秘密からミュールフェルトのエピソードまで興味深い話を沢山うかがった。

クラリネット製作家 ヨッヘン・セゲルケ



バロッククラリネットから
ブラムス時代のクラリネットまでの
知られざるエピソード。

取材・構成：佐伯茂樹
通訳：梅田瑠子

クラリネットはどのよう にして発明されたのか？

でしよう。初期の例では、ヴァレンティン・ラスゲパーという人が、室内オーケストラの編成でクラリネット協奏曲を書いていて、1756年に楽譜が出版されています。

この曲では、クラリネットはホルンでも代用出来ました。クラリネットとホルンとの親密な関係は、後の時代に出てきたハルモニウムジークの基礎にもなっているんです。

それは興味深いですね。

セゲルケ 最初に作られたクラリネットはD管でしたが、次第にC管、Bb管と長くなっていきました。そうした中で、ホルンとクラリネットの相性が良いことが分かってきて、さきほど話したラスゲパーの曲などが書かれました。

クラリネットがD管から長くなっていった要因はどこに？
セゲルケ バロック時代のクラリネ

に向かったんですね。5度や3度の響きを楽しむように。

バロック時代には変口調というのはいま一般的でなかったはずですが、どうしてクラリネットはBbという調になったのでしょうか？

セゲルケ それはやはりホルンと密接な関係があります。後期バロックから初期古典派のオペラではA管やC管でしか書かれていなくて、初期のハルモニウムジークでもC管クラリネットが使われていたのですが、1780年頃にホルンがEb管になると、その響きに合わせるためにクラリネットもBb管になったのです。

クラリネットの歴史では「シヤリユモ」という楽器からクラリネットが出来たとされていて、このことから、クラリネットはシヤリユモよりもずっと後から使われるようになったと誤解している人が少なくないようです。実際には、シヤリユモとクラリネットは、それほど離れて歴史に登場する楽器ではありませんよね？

セゲルケ シヤリユモとクラリネットは、バロック時代から平行して使われていました。バロック時代に「クラリネット」と指定した楽譜が少ないことが、そんな誤解を生んだのだ

クラリネットはシヤリユモと一緒に、
バロック時代から使われていた楽器。
18世紀中頃には協奏曲まで書かれている。



歴史的クラリネットで演奏する「クラリモニア」。左からエッケハルト・ザウアー、ヨッハン・セゲルケ、ベルンハルト・ケスリングの各氏。東京・多摩で開かれた国際クラリネットフェストにも出演。手にしている楽器は今回持参したセゲルケ氏製作の楽器たち。

フランスで書かれたクラリネットのレパートリーにC管で書かれたものが多いのに対して、ボヘミアで書かれたレパートリーにBb管が多いのはそのためでしょう。ホルン奏者の

多くがボヘミア出身でしたから。——ヨハン・クリストフ・デンナーがクラリネットを発明したとされていますが、当時、シャリユモーとクラリネットはどう違っていたので

すか？ セゲルケ シャリユモーは、17世紀から民俗楽器として存在していました。キーは付いておらず、7個のトーンホールを持っていました。

オーボエのベルを付けて！
クラリネットを発明したヨハン・クリストフ・デンナーの職業は森の番人だったんです。その道具として、鳥を呼び寄せるシングルリードの小さな笛を吹いていた。こんな風にして音程を変えて鳥の鳴き声を模倣して。

デンナーの身分は都市音楽師で、自分の楽器を製作することが許されていたのですが、トランペットだけは作ってはいけませんでした。トランペットは王宮や公爵と関わりがある楽器で、専門の製作家が作っていたから、都市音楽師が作ることは禁止されていたのです。

デンナーは、ニュルンベルクで楽器製作を学びました。その際、いろいろな楽器のパーツを組み合わせる試みをしました。それまでの伝統的なシャリユモーは、鳥の呼び笛とリコーダーのボディを組み合わせたようなもので、指が届く範囲の音域しか出ませんでした。そこでデンナーは音域を拡げようとして、管の上部に2個のキーを装着したんです。

やがて彼は、シャリユモーを強く吹くと上の倍音が出て、トランペットのような音がすることを発見しました。そこから、この2キーのシャリユモーにオーボエのベル（次ページ写真）を装着して生み出されたのがクラリネットだったんです。ただし、真ん中のソ（開

ヨッヘン・セゲルケ

クラリネットはどのようにして発明されたのか？



シャリュモアのベルはリコーダー型だが、これにオーボエのベルを付けることでクラリネットが生み出されたとセゲルケ氏は言う。写真はセゲルケ製C管クラリネットのベル。

放のソ)から、その上のドの間の音(ラーラ#シ)を出すために、下の後ろ側にあつたキーを上げて音階になるようにいろいろ改良しなければなりませんでした。

デンナーは演奏家としても優れていて、フランクフルトで最初に行われたコンクールの審査員でもあつたんですよ。フランクフルトは現在でも楽器の見本市で有名ですよ。当時はそこで、様々な国から来た都市音楽師たちが技を競い合つた。その場で各国の新しい情報が交換されたことは容易に想像がつかます。

デンナーは、そこでフランスのオートテールの影響を受けました。オートテールは、現在クランボンの工場があるベルサイユの近くに工房を構えていて、原始的なフルートを3分割の構造にしたり、シャルマイを3分割のオーボエにした人物です。他にもドルツイアンから改良したファゴットも製作していました。

デンナーは、そうしたフランス生まれの新しい木管楽器を目にして、フルート、オーボエ、ファゴットをドイツで初めて製作したんです。「二

ユルンベルクの音楽家と数学者」という文献を見ると、デンナーの工房の版画が描かれていて、そこにはフルート、オ

ーボエ、ファゴットが描かれているんですよ。それ以前のポマーヤドルツイアンなども描かれています。

——シャリュモオには大小のサイズがあつたようですが、初期のクラリネットにそうしたファミリリーがなかったのはなぜ？

セゲルケ おっしゃる通り、シャリュモオにはソプラノ、アルト、テナーとルネサンス時代から続くファミリリーがありましたが、クラリネットは調性で種類を分けるようにしただけでした。と言うのも、クラリネットはシャリュモオの低い音域からクラリーノのような高い音域まで一本で出すことが出来たので、ソプラノやアルトと持ち替える必要がなかったからでしょう。



バセットホルンの低音ドは？

——バセットホルンのこともお聞きしておきます。モーツァルトの木管アンサンブルの譜面を見ると、初期はイングリッシュホルンを指定しているのに、後期ではバセットホルンになっていきます。両者が一緒に演奏することがないのは、同じ役割を担っていたからでしょうか？

セゲルケ バッサウのマイヤーホーファーが製作した現存する最古のバセットホルンは、オーボエ・ダ・カッチャやイングリッシュホルンと同じようなカーブを描いた形状をしていました。くり抜いた木を張り合わせて革を巻く形で、ベルの部分がよく似ていたので、多くの聴衆はどち

C管バロッククラリネットでマッチョンの三重奏曲を披露するクラモニアのメンバー。



左はC管バロッククラリネットの2キー。向かって左がレジスターキー、右が左手人差し指で操作するラのキー。右は同クラリネットのマウスピースとパレル。当時両者は一体で作られ、多くがマウスピースが逆向き(上唇側にリードがくる)だった。

らの楽器を吹いているのかよく分からなかったに違いありません。リードが1枚か2枚なのかを判断するのも難しかったと思うし。

——バセットホルンは当初からクラリネットよりも音域が広がつたんですよね？

セゲルケ ええ。初期のバセットホルンには低音のキーが一つ付いていて、通常のミよりも低いドの音を出すことが出来たんです。しかし、ドとミの間の音は出すことが出来なかつた。当然、その間の音も出したいということ、その後キーが追加されて下のドまで全音で下がることが出来たようになりました。

——どうして、バセットホルンだけ下のドを先に出そうとしたんです



通訳をお願いしたクラリネット奏者の横田
緑子さんもバセットホルンで演奏に参加。

よう？
セゲルケ それは、ナチュラルホル
ンと関係があります。当時のナチュ
ラルホルンの低音域は、レは出ない

けど、ミヤドは自然倍音が出ました
からね。バセットホルンでは、低い
ドを出すために楽器の長さを延長し
なければいけません、距離を稼ぐ

ために管が迂回するボックスを設け
たのでしよう。

——バセットホルンの管体が曲が
ついでベルが付いているのは、狩
猟用の角笛の形を象徴的に模倣した
ということはないのでしょうか？

セゲルケ おそらくそういう意図は
あったと思います。どのみちベルを

ないでしょう。フリーメイソンのモ
ットーは「自由、平等、博愛」で、
3という数字がシンボルになってお
り、当時はバセットホルンを3人で
演奏するのが流行しました。

ミュールフェルトの楽器

——セゲルケさんは、ブラームス

クラリネットを発明したとされる
J・C・デンナーの職業は森の番人で、
シングルリードの鳥笛を吹いていました。



バセットホルンは初期の頃から最低音が通常のクラリネットよりも低いドまで出た。管長を長くするためにご覧のような箱の中で管を折り返し、距離をかせいでいる。

製作するためには金管楽器の製作者
の協力が必要でした。

——モーツァルトの作品では、バ
セットホルンとフリーメイソンの関
係がよく語られますが、この楽器の
「くの字」のフォームは、フリーメイ
ソンのシンボルであるコンバスとは
関係ありませんか？

セゲルケ その点については調べて
いないので分かりません。ただ、数
字の面の関連性があることは間違い

のクラリネット作品の初演者として
有名なミュールフェルトが使ってい
た「オッテンシュタイナー」という
クラリネットを復元して、いますが、
その楽器は通常のドイツ式とどこが
違うのですか？

セゲルケ 現在ベーム式と呼ばれて
いる楽器は、ビュッフエとクローゼ
によって開発されたわけですが、そ
のとき、オッテンシュタイナーは、
見習いのような形でパリにいたんで
す。まさにその開発の過程を目撃し
ていた。

この経験から、自分の楽器にもリ
ングキーのシステムなどを取り入れ
たため、オッテンシュタイナーの楽
器は外見はベーム式によく似ていま
す。下管の音孔の位置、ベルやパレ
ルなど各部の長さもベーム式とほぼ
同じです。

——なるほど。管の構造自体はフ
ランス式に近いと言っているわけ
ですね。でも、ビュッフエが手を加え
たファアのクロスフィンガリングはそ

ヨッヘン・セゲルケ

クラリネットはどのようにして発明されたのか？



ブゾームスの4つのクラリネットの発明を初演したことで知られるリヒャルト・ミュールフェルトが使用していた「オッテンシュタイナー」のコピー（セゲルケ製）。運指は非ブゾームスだが、ベームクラリネットを参考に作られたため、通常は広く右手の指の問題なども悩むように感じ。

のまま残されている？

セゲルケ そうです。オッテンシュタイナーは、伝統的な指使いをそのまま使えるように残したんです。それまでの8キーや13キーの楽器と同じ指で吹けるように。

ただし、下管のキーはかなり工夫してあります。下の方の音孔を大きくすると音がよく響くのでそれを実行し、左手の小指にも複雑なメカを搭載しました。このような仕組みは既にミュンヘンにあったものですが。

——オッテンシュタイナーがパリにいたのは意外ですが、どうしてミュンヘンに戻ってきたのですか？
セゲルケ 当時のフランスの政策で外国人が居辛くなったのと、ミュンヘンにいたクラリネット名手、カール・ペールマンとの関係が出来てミュンヘンに戻ってきたのです。

ミュールフェルトと ワグナーの関係

——ミュールフェルトがこのシステムの楽器をしようになったきっかけは何だったのですか？

セゲルケ その点に関しては詳しく分かっていません。ミュールフェルトが在籍していたマイニンゲン宮廷オーケストラの同僚にヴィルヘルム・ライフという名手が出て、彼はミュンヘンのペールマンのところに習いに行っていた。

1878年、ワグナーが、クリスマスコンサートで吹くクラリネット奏者を探していて、当初ライフが

ミュールフェルトの演奏を聴いた ワグナーは「世界があなたにひれ伏す でしょう」と賛辞を贈った。

候補が上がっていたのですが、彼が病気になるってしまい、代わりにミュールフェルトが行くことになったんです。そのときにミュールフェルトが吹いたベートーヴェンの（エグモント）序曲の音をワグナーが聴き、「貴方はもっとクラリネットを多くの人に聴かせるべきだ。そうすれば世界がひれ伏すでしょう」と絶賛したんですよ。

それよりも前にワグナーによって始められたバイロイト祝祭管弦楽団では、各地から名手を呼び集めていたのですが、いざ集めてみると、土地によってピッチが異なっていて響きが合わないという問題が生じた。そこでワグナーは、パリの低いピッチをドイツに持ってきて統一しようと考えたのです。でも、その実現のためにはお金がかかるので、簡単

には行きませんでした。全ての木管楽器を新しく買い替えなければいけませんし、政治的にも容易ではありませぬからね。

そんな状況の中、バイエルンだけは先に実行してたんなんです。国王のルートヴィヒ二世がワグナーのバトロンでしたからね。1868年頃には全ての楽器が低いピッチに切り替えられていた。

——そのピッチはA#435？

セゲルケ もう少し高くて438から440くらいだったようです。パリの435というピッチは室温15℃で測った場合なので、楽器を吹いたときはもう少し高かった。

——なるほど。それでワグナーはミュンヘンから奏者を招いたんですね。

セゲルケ そう。最初に集まったときはピッチは本当にバラバラで、みんな楽器を無理矢理抜いたりしたけど合わなかったらしい（笑）。そこで、ゴジマ・ワグナーが、各地の歌劇場に「どうかピッチを統一してほしい」と手紙を書いたんです。彼女はリストの娘なので影響力がありましたからね。

ミュールフェルトがいたマイニンゲンのオーケストラは、1874年12月1日に彼らの国王から「1ヶ月後には新しいピッチの楽器で演奏出来るようにすぐに楽器を購入しなさい」という命令が下ったんです。楽器製作者は、数週間の間にすべての新しい管楽器を作らなければいけな

防音

全てを備えた理想空間

響き、そして静けさ。

ミュージックキャビン

高遮音型ユニット式組立防音室。柱や梁の形、窓、扉の位置まで自由に設計できます。

ビルトインタイプ

高遮音型フルオーダー式防音室。完全オーダーシステムにより、どんな形の部屋にも対応でき、スタジオなみの音響空間を自由に再現できます。

ホームページ

高橋建設株式会社

ビルトインタイプ・現場施工型

〈音響・映像・防音・建設・設計・施工〉

URL

www.takahashi-kensetsu.co.jp

ミュージックキャビン株式会社

組立式防音室 〈設計・施工〉

URL

www.music-cabin.co.jp

一級建築士事務所

高橋建設株式会社

ミュージックキャビン株式会社

本社

〒216-0032

神奈川県川崎市宮前区神木1-7-8

TEL:044-853-0547

FAX:044-852-1588

社団法人音楽スタジオ協会会員/社団法人音響学会会員/社団法人ピアノ調律師協会会員

お客さま相談室

0120-55-0065



東京芸術大学音楽学部の正門前で。右端は通訳をお願いした横田瑛子さん。

かった。それを行うメーカーを探したところ、ミュンヘンでペールマンに習ったライフがオッテンシユタイナーを推薦したんです。

オッテンシユタイナーはクラリネットだけでなく、フルート、オーボエ、ファゴット、トランペットからホルンまで製作していて、すでにバイエルン国立歌劇場が採用してしましたからマイニンゲンでも白羽の矢が立てられたのでしょう。でもその当時、オッテンシユタイナーの工房には6人しか従業員がいなかったの、クラリネット6本、オーボエ2本、ファゴット2本、ホルン4本を12月22日までに製作するのは不可能でした。当然、期日には間に合わなかったようですが、翌年までには納品されたようです。

これらの楽器は、1876年に「ニーベルングの指輪」が初演されたときに使用されました。バイロイトの劇場も完成したし、低いピッチの楽器も揃ったわけです。その2年後にワーグナーに気に入られたミュ

ールフェルトは、オッテンシユタイナーの楽器を使ってバイロイトの首席奏者を務め、1905年までソロクラリネット奏者として籍を置いていました。1882年の「バルジファル」の初演にもいたわけですが、ちょうどこの9年後にブラームスとも出会っている。バイロイトではなくマイニンゲンで。

ミュールフェルトの音は？

——ミュールフェルトは、ワーグナーとブラームスの両方に気に入られていたわけですね。当時、両者の派閥は激しく対立していたのでは？

セゲルケ そうです。でも、そういう対立は評論家の問題で、演奏家にとつてはあまり関係なかったのですよ。

——それで一連のブラームスのクラリネット作品が生まれた。

セゲルケ ええ。ブラームスは、「ミュールフェルトがいけない場合には五重奏を演奏してほしくない」とまで言うくらい彼を信頼していたんです。

——ブラームスの作品を、オッテンシユタイナーの楽器とエーラー式で演奏したのでは、かなり違う響きになるのですか？

セゲルケ 指使いはほとんど同じですが、得られる響きはかなり違います。オッテンシユタイナーの楽器の方が上の倍音が豊かで、歌うような表現を作りやすい。

フランス式の音色に近い？

セゲルケ それはどうでしょう。同じ時代のフランス人とはちよつと違う音色を目指していたように思います。そのことは両者のマウスピースの違いを見るとよく分かります。これはあくまでも私の想像ですが、ミュールフェルトは、かなり明るくて通る音をしていたんだと思います。

日本のプレイヤーの方も含め、私が作ったペールマンシステムの楽器を購入する人が増えてきたので、ぜひ一度この楽器でブラームスの作品を体験していただきたいと思っています。きっとこれまでの重厚なブラームス観が変わるに違いありません。